

虐待防止に向けた事業所づくり



一般社団法人縁パワー人材開発研究センター
代表理事 中野 絢子



一般社団法人 縁パワー人材開発研究センター 代表理事 中野 あやこ

保育士・児童発達支援管理責任者として、障害のある子どもの発達支援に15年以上従事。現場での虐待リスクと向き合い、子どもの権利を守る支援のあり方を探求しています。現在は横浜市を中心に、虐待防止の視点と具体的な対応を研修等を通して現場に届けています。

性の支援に関する研修、支援者育成

児童向け性のワークショップ

性の課題を持つ子の事例検討

無料勉強会、情報発信@コミュニティ

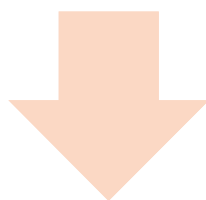
都筑区児発・放デイ連絡会 事務局

地域の事業所同士の関係づくり

一般社団法人縁パワー人材開発研究センター
お問い合わせ先：n3a2ya6@gmail.com
<https://empower-web.jimdosite.com/>

性的虐待から子どもを守る事業所づくり

- ワーク・からだの境界線・同意
- 性的虐待について
- 性的虐待を防ぐ事業所へ
- 子どもの「自分を守る力」を育む



支援現場の不安は小さく、性加害者は勝手に去っていく事業所へ

なぜ私たちはみんな服を着ているの？

私たちは社会生活を送る上で、必ず衣服を身に着けます。

では一体なぜ衣服を身に着けるのでしょうか？

お子さんにはどう説明しますか？

- 裸だと恥ずかしいから？
- マナーだから？
- 風邪をひかないため？
- . . .

社会の中で衣服を身につけることの意味

衣服の役割とは

- 身体を暑さや寒さ、外部の刺激から守る
- 文化や社会の中で自分らしさを表現する

だけでなく

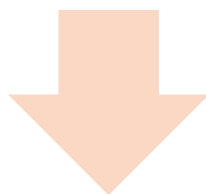
- 自分の身体のプライバシーを守る
- 自分と他者との「からだの境界」を表す

肌の露出が多い服装へのイメージ

被害者側に原因を求める固定観念

「自分の身体を見られたいのだろう」→ 性に対して積極的

「自分でリスクを高めている」→ 危ない目にあっても仕方ない



だから、性被害にあってしまったのだろう

どんな服を着ているかと、その人の身体に触れてよいかどうかは
別の問題です。

服装を理由に、性被害の責任を被害者に求めることはできません。

性暴力に対するよくある思い込み

\\ 露出度の高い服を着ていたせい? //

どのような服装でも
被害にあうことがあります。

「痴漢は重大な犯罪です！

被害者は悪くありません！」

内閣府によるWeb記事より

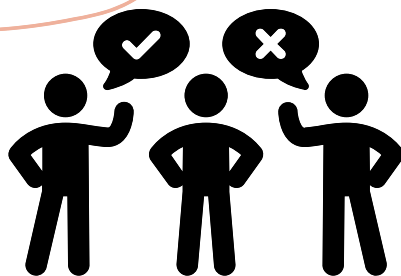
身体的な距離

よく自分から膝に乗ってきたり抱きついてくるような、
身体的な距離の近い子がいる場合

きっと愛情不足で直接的な肌の
ふれあいを求めているのだろう

だからといって、子どもの求め
るままに、密着度の高い身体接
触を行うことはどうなのか

自分のからだも守りたい…
受け止めてあげたいけれど、抱
きつかれるのは嫌なんだよな



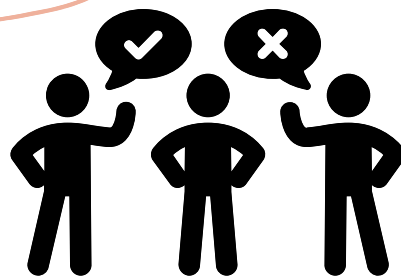
意見や違和感、感じたことを
そのままにせず話し合う

身体的な距離

よく自分から膝に乗ってきたり抱きついてくるような、
身体的な距離の近い子がいる場合

膝に乗ったり抱きつく行動の
背景はなんだろう…
実年齢で見た時にどうかな…

アセスメントし直そう！
支援計画も見直してみよう！



子どもの最善の利益を
考慮した支援

からだの権利 = 身体の自己決定権

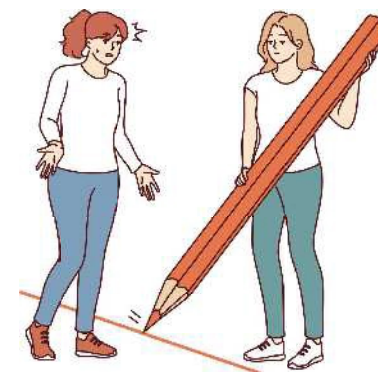
誰しもが自分自身のからだに対し、
誰が、どこに、どのようにふれることができるのかを
自分が決める権利を持っている！

- 自分のからは全て自分のものであり、
どう触るかは自由
- 他の人に触ってほしくない時は、拒否し
ても良い



からだの境界線

- 身体の反応を感じる
自分の境界線が見えてくる
- 境界線は、簡単に越えたり越えられたりする
見えないからこそ、伝え合うことが必要
- 境界線は「可動式」
相手・場所・状況・気分によって変わる



表現することから関係は始まる

同意

- 選べること
「する・しない」を自分で決められる
- 確かめ合うこと
同意は、お互いを尊重するためのやりとり
- 「NO」が言えるとは限らないこと
嫌でも、とっさに伝えられないことがある



性的虐待の定義

- 障害児にわいせつな行為をすること
- 障害児にわいせつな行為をさせること

- 障害のある児童の同意や理解がないまま、体のプライベートな部分に触れたり、性的な行為を行うこと
- 障害のある児童に対して、性的な行為をさせたり、見せたり、関わらせたりすること
(本人の意思に関係なく行われるものを含む)

性加害を支える「認知の歪み」

性加害者には、自らの行為を正当化・矮小化したり、責任を被害者側に帰属させたりする認知がみられることがあります。

- 子どもの方からやってきたこと
- 別に嫌がっていなかった
- 一生懸命に優しくしようとしただけ
- これが自分のやり方だから仕方ない
- どうせ子どもは意味がわかっていない
- ちょっと触っただけで大げさだ
- きっとすぐに忘れるだろう

なぜ性的虐待は気づかれにくいのか

加害に至るまでの関係性と、被害が表に出にくくなる構造を知ることが重要です。

1. 性的虐待は「目に見えにくい」
2. 「性欲」の問題だけではない（支配や攻撃の手段）
3. 「より弱い存在」「抵抗しにくい」相手が狙われる
4. 身近な存在として近づき、信頼を利用することがある
5. 発覚しないように「恥ずかしさ」「罪悪感」につけこむ

障害者の性暴力被害に関するデータ

◆アメリカ疾病対策センター（CDC）報告（NISVS,2024）

- 障害のある成人は親密なパートナーによる性暴力の被害リスクが高い
- 女性の性暴力被害（例：強姦、性的強制）において、障害のある女性は障害のない女性よりリスクが高い傾向がある
- 男性においても「性的強制」「非接触の不本意な性的経験」で障害ありが高い割合を示す

◆アメリカの犯罪被害統計データ（2009～2019）

- 性的暴行の通報率は障害者の方が低い（19％）

障害者の性暴力被害に関するデータ

◆2025年版犯罪白書（2025年12月19日発表）

- 精神障害のある人が受けた性犯罪被害で、加害者と面識のあったケースは7割
- 精神障害者への加害者は、福祉施設の職員など「支援関係者」が最多の33%
- 当時から「被害認識あり」は38%→発覚の遅れにつながる
- 加害者になり得る立場の人と1対1になる状況にしないことが重要

障害児への性加害実態は見えにくい現状がある

性的虐待を防ぐ事業所 3つの柱

1. 安全な支援環境づくり

見通しのよい環境・死角をつくらない運用

2. 子どもを守る組織文化づくり

性について話せる・違和感を共有できる大人集団

3. 子どもの「自分を守る力」を育む

からだの権利・プライベートパーツ・相談する力

安全な支援環境づくり

① 支援中の設備面での死角をなくす

- ☐ 活動室の中に視線を遮るものがない
- ☐ 個室・半個室を密室にしない
- ☐ 各部屋の出入り口が見通せる
- ☐ 事務所や倉庫へ子どもが出入りしないようにする
- ☐ ドライブレコーダーを使用する

安全な支援環境づくり

② 支援中の運用面での死角をなくす

- 原則として子どものみや、大人と子ども2人にしない
- 個室での介助における安全のルールがある
- 「この子なら大丈夫」といった例外を安易に作らない
- 支援中は意識的に支援者同士で目配せ、声掛けし合う
- 介助方法やヒヤリハットの情報を共有する

安全な支援環境づくり

③事業所内を整理整頓する

- ❑ 私物や機器の持ち込みを管理する
- ❑ 物の置き場所を固定する
- ❑ 物の配置で視界が遮られないよう調整する
- ❑ 不要物をそのまま放置していない
- ❑ 上記項目の定期チェックを仕組みにする

子どもを守る組織文化づくり

① 「性」 について話せる職場

- 「性」 を特別な話題にしない
- 「性」 について学び、共通理解をもつ
- 相談できる「つながり」をもつ

「性」「セクシュアリティ」

「性」「セクシュアリティ」と聞いて
思い浮かぶのはどんなイメージですか？



「性」を特別な話題にしない

「性」に関するネガティブなイメージ

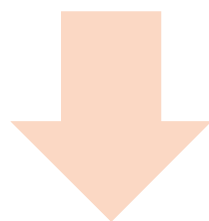
「いやらしい」「恥ずかしい」「言ってはいけない」

子どもが初めから持つ

大人から学習する

「性」「セクシュアリティ」とは何か

人は生まれながらに「性」を持ち、からだの変化を経験し、人との距離や関わり方を学び、「自分はどうしたいか」「これは嫌だ」といった感覚を育てながら生きている。



自分らしさ

身体感覚、性表現、性自認、性的指向、
価値観、自己決定、人との関係・・・

国際セクシュアリティ教育ガイダンス

包括的な性の学びのための
国際的な指針

8つのキーコンセプト

1. 人間関係
2. 価値観、人権、文化、セクシュアリティ
3. ジェンダーの理解
4. 暴力と安全確保
5. 健康とウェルビーイングのためのスキル
6. 人間のからだと発達
7. セクシュアリティと性的行動
8. 性と生殖に関する健康



国際セクシュアリティ教育ガイダンス【改訂版】
—科学的根拠に基づいたアプローチ
ユネスコ（編集） 明石書店

「性」も発達の一部



日々の経験や人との関わりが「性」を育てる

「性」について学び、共通理解をもつ

なにからどう学べばよいかわからない場合

一冊だけ性教育関連の書籍を用意して職員で回し読み

参考図書

- 「あっ!そうなんだ!性と生: 幼児・小学生そしておとなへ」 浅井春夫
- 「おうち性教育はじめます 一番やさしい!防犯・SEX・命の伝え方」 村瀬幸浩
- 「発達が気になる子の性の話 みんなでいっしょに学びたい」 伊藤修毅

「性」について学び、共通理解をもつ

体験型学習の場を設ける



こころ・からだの大切さ、
人権、人との関わり、性について
遊びながら学べるかるた

相談できる「つながり」をもつ

困った時の相談先を探す

性の課題は家族、支援者、事業所で抱え込みやすい

身近な専門職との連携

- PT・OT・STなどのリハビリテーション専門職
- 公認心理師・臨床心理士
- 助産師・保健師
助産師会へは「いのちのはなし」出張講座を依頼可能
- 医師
(小児科・児童精神科・婦人科・泌尿器科など)

地域の支援機関との連携

- 基幹相談支援センター
 - 相談支援事業所
 - 地域療育センター
 - 児童相談所
 - 警察署
- など

子どもの「自分を守る力」を育む

「怖い人」から身を守る、ではなく…

日頃の人との関わりの中で
「安心の関わり方」を練習する
「援助を求める・相談できる力」を引き出す



「どんなことをされたら、おかしい（危険）か」がわかり、
何かあった時には回避したり、身近な大人に伝えることができる

からだの権利 = 身体の自己決定権

- 自分のからはだは全て自分のものであり、どう触るかは自由
- 他の人に触ってほしくない時は、拒否しても良い

あなたの身体は大切です

目の前の子にどう伝えますか？



からだ大事を伝える支援（例）

自分の身体への興味を引き出す

- 身体の部位や名前を知る
- 身体を動かし、自分の身体の感覚に気づく
- 「気持ちいい・痛い・くすぐったい」などを言葉にする
- 成長や身体の変化を肯定的に伝える

身体介助の場面で伝える

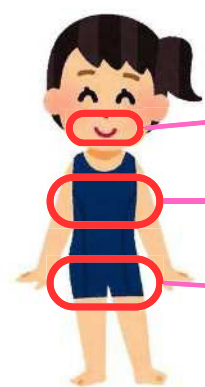
- 触れる前に「〇〇するね」と声をかける
- 本人の表情や反応を確認しながら介助する
- できる部分は本人に任せる
- 着替え・排泄などではプライバシーを守る
- 「嫌」「自分でやる」などの意思表示を受け止める

遊びの中で伝える

- 身体を使って遊び、自分の身体の楽しさや心地よさを感じる
- 「できた！」という身体を使った成功体験を重ねる
- ふれあい遊び、からだ遊び、運動遊びでは、子どもの「やめて」を大切にする
- 友だちの身体も、自分の身体と同じように大切に扱う

プライベートパーツ・ゾーン

- 自分の身体部位の中で、身体の中につながる重要な部位であり、性（生）に関係する特に大切な場所
- わかりやすく子どもでもイメージできるように、「水着で隠れる部分と口」と説明することが多い



口

胸

性器

お尻

特に大事な場所なので
人に見せたり触らせない
人のも勝手に見たり触らない

人と関わる時の基本ルールとして伝える

水着で隠れるところと口は、人に見せたり触らせたりしません。
他の人の水着で隠れるところと口も、見たり触ったりしません。

もし見たり触ってきたり、見せてきたり触らせようとしてくる人がいたら逃げていいよ！

そして
必ず大人に知らせてね！



絵本を教材として活用する

参考図書

- 「だいじ だいじ どこだ？」 遠見才希子 (著), 川原瑞丸 (イラスト)
- 「うみとりくの からだのはなし (性とからだの絵本)」 遠見才希子 (著), 佐々木一澄 (イラスト)
- 「いいタッチわるいタッチ <だいじょうぶの絵本>」 安藤由紀 (著)



からだの権利・境界線・同意の紙芝居

京都市北区オリジナル紙芝居「かっちゃん はなみず でた」



「自分や相手の身体を大切にすること」
について考える
きっかけづくりとして使える教材



援助を求める・相談できる力を引き出す

相談される大人のシンプル3か条

1. 相談される大人である前に、相談する大人である
2. 日頃から子どもの話や疑問に耳を傾け、丁寧に応えている
3. 驚かない・責めない・決めつけない・評価しない

「性」に関する相談のハードルを上げない

性に関する言葉や話題に対する身近な大人の反応
が与える影響は大きい

性の話題だけ何となく無視されたり、ごまかされたり、否定される


性の話題は

嫌がられること
怒られること
恥ずかしいこと

話してはいけないこと
隠さないといけないこと

自分の感覚や身体に興味を持つことへの不安感、否定感にもつながる

安心して、適切に話せる関係と場をつくる

教えてくれる人 = 相談できる人



- 「性」のことを話しても大丈夫
- 自分のからだや気持ちは大切にされる
- 困ったときには、この人に話しても大丈夫



性に関する話題に対応する

性について伝えるときに大切にしたい3つの視点

1. 性を肯定的にとらえる
2. 性を科学的にみる
3. 性の多様性を理解する

怖がらせない、ウソやごまかして伝えない、その子らしさを否定しない

性に関する話題に対応する

慌てないで対応するための「とっさの一言」例

- 「話してくれてありがとう」
- 「へえ、よく知ってるね」
- 「他に知ってることある？」
- 「なんで気になったのか教えてくれる？」
- 「一緒に調べてみようか」

もしその場でできなかったとしても…

「嫌」と言えないこともある

逃げられないこともある

相手の要求に応じてしまうこともある

あとからでも誰かに「伝える」ことができたなら、
被害の継続や拡大を防ぎ、
その日からの安全を守ることにつながります。

「性」に向き合える事業所へ

今日からできそうなことを、一つ考えてみましょう。

性的虐待を防ぐ事業所づくりは、特別な取り組みから始まるものではありません。

日々の支援の中で、一人ひとりができる小さな行動の積み重ねが、子どもを守る環境と文化をつくれます。

一緒に性的虐待ゼロの安全安心の事業所、そして横浜市にしていきましょう！

いつでもお手伝いさせていただきます🤝